

聞こえる声のもつ心の声

白百合学園高等学校 三年 佐藤 文香

今から一年ほど前、都心に買い物に行く私が会社に向かう父と小田急線のホームで電車を待っていると「急行に乗りたいのだけれど、誰か案内して下さいませんか。」という大きな声が聞こえた。突然現れた老人の姿に私を含め、周囲の人は戸惑った。老人はもう一度「急行に乗りたいのだけれど。」という苛ついた声で言った。近くに立つ人たちが無視したり戸惑ったりする中、少し離れて立っていた父が近づいていき、老人と何やら言葉を交わし、老人にまくしたてられた。老人は、盲導犬を連れただ視覚障害者だった。

しばらくしてやってきた急行列車に、父の誘導で老人と盲導犬が乗り込んだ。車内は何か異質なものが乗り込んできた雰囲気になり、私も少し離れたところに立って二人の会話を聞いていた。最初はとげとげしかった老人の声はおだやかになっていった。老人によると、視覚障害者になってから十年以上盲導犬と共に一人で暮らしており、そして、これから東京駅から神戸に住むお姉さんのところに行くとのことだった。すると、父が老人に「私は代々木上原駅で降りなくてはいけないので、娘が新宿駅まで案内します。」と言った。

私は、あまりにも急に責任重大な慣れないことを任されたために、代々木上原駅から新宿駅までの約五分がとても長く感じられた。その間、老人は、高齢者への盲導犬の付与は稀であり、自分は幸運であること、街中で助けを求めてもなかなか助けが得られないことを語ってくれた。そのとき、私の中で最初に感じた戸惑いが、役立てたということへの安堵へと変わっていた。

その日の夜、気になって視覚障害者について調べてみた。洗面や掃除、調理といった日常生活に加え、文書処理や移動など老人の姿と重ねると、想像しがたいほどの困難があると分かった。母にこの話をしたところ、以前、交差点の中に入り込んでしまった白杖の視覚障害者を助けた話をしてくれた。その人は、歩道の停止線から出てしまい、危うく車にひかれるところだったらしい。「交差点では車や周りの人の音を聞いて、あとは、覚悟を決めて行くしかないんだ。」と怒りに近い強い口調で言ったそうだ。私は、健常者と障害者の間に埋まることの難しい溝がある気がした。

大声で助けを求める老人の苛立ち、交差点に入り込んだ白杖の人の怒り。彼らから聞こえる激しい声は、私たちに伝えたい彼らの心の声、私たちが受け止めようと思わない本当の声の裏返しである。彼らが伝えたいこと、分かってほしいことを思い知った。今まで知らなかったのは、私に彼らの願いに触れる機会がないからであると正当化するのとは間違っている。機会がないのではなく、無関心でいられるならばそのままでもいい、という気持ちの奥底にあるからだと思う。だから、私は駅

のホームで老人の困っている姿をただ傍観し、電車の中でも距離をとって立ってしまっただのだ。

新宿駅でJRの駅員に事情を話した後の別れ際、老人が「本当に助かった。お父さんにありがとう。」と言った。最初に駅のホームで示した、大声で助けを求めながらも周囲に対して隠せていなかった警戒感とは全く別の、信頼とでも呼べる温かいものが老人から伝わってきた。私は、この目の不自由な老人が無事に神戸にたどり着けることを願い、JRの駅員にあとを託した。

視覚障害者のホームからの転落事故が相次いでいる。この出会いの数日後、銀座線で盲導犬を連れた男性が線路に転落して亡くなった。さらに、半年後には京浜東北線で同じく盲導犬を連れた男性が転落し亡くなった。いずれも誰かにぶつかったのではなく、足を踏み外して線路にあやまって転落したのだった。ホームドアの設置が遅れていたことも問題だが、当然、その場には人がいた。彼らが無視せず声をかけるなど気にかけていたならば防げたかもしれない。

あの日以来、街中の様々な場面で障害者を意識するようになった。相変わらず、周囲の人たちは戸惑い気味だが、必ずしも冷たい態度ではないこともある。「大丈夫ですか。」と「ありがとう。」の一言でその場の空気がほっとしたものに変わるのだ。私たちが障害者の心の声を聴き取るために必要なこと、それは、わずかでもいいから勇気を持って、それぞれが信頼を築き上げることだと私は思う。